



一般社団法人 長野県植物防疫協会
〒380-0837
長野市大字南長野字幅下667-6
長野県土木センター内
電話 026-235-3510
F A X 026-235-3583

Table with 2 columns listing contents: 令和7年農作物病害虫・雑草防除基準の主な改正点, 特集 カメムシ, 普通作物, 果樹, 小麦ほ場の強害雑草オオブタクサの生育特性と防除技術, 植防短信, 地域情報, 南信州, 木曾, 協会だより

令和7年 農作物病害虫・雑草防除基準の主な改正点

農業技術課 専門技術員 横澤志織

令和7年2月に発刊された「令和7年農作物病害虫・雑草防除基準」において、新たに普及に移す農業技術に採用された農薬や防除技術の追加・変更など、主な改正点を下表にまとめた。なお、紙面の都合上、農薬登録変更に伴う使用基準（使用時期や使用回数など）の変更や登録失効などは省略した。農薬の使用に際しては、最新の農薬登録内容をご確認いただきたい。

【病害虫防除所ホームページ】

◆令和7年病害虫雑草防除基準

https://www.pref.nagano.lg.jp/bojo/nouyaku/bojokijun/index.html

◆登録内容変更一覧（冊子発行後の変更点）

https://www.pref.nagano.lg.jp/bojo/nouyaku.html

1 全体に係る改正点

(1)長野県総合防除計画の掲載

令和6年3月29日に策定された「長野県総合防除計画」の概要を冒頭に掲載し、総合防除の実施方針、農薬の適正使用および危害防止対策、指導の実施体制並びに関係機関との連携に関する事項などを記載した。

(2)魚毒性分類基準の変更

従来、48時間の半数致死濃度に基づく分類（ABC分類）と、農薬評価書に記載の96時間の半数致死濃度に基づく分類（旧ⅠⅡⅢ分類）を併記してきたが、令和7年版より、農薬の生活環境動植物に対する影響評価中の魚類への評価（影響指数）に基づき再分類し記載した。

(3)イミノクタジン酢酸塩含有剤、ダズバンDFの削除

令和7年中に順次登録失効見込みであることから、記載を削除した。

(4)ベノミル含有剤およびチオファネートメチル含有剤の注意事項追加への対応

上記薬剤に、「本剤を使用した場合には、チオファネートメチル（ベノミル含有剤の場合）／ベノミル（チオファネートメチルの場合）を含む剤を使用しないこと。ただし、種子への処理、種籾への処理および塗布処理は除く。」との注意事項が追加されたことから、これに従い記載を整理した。

(5)水稻除草剤推奨農薬の整理

長野県内での流通量が少ない除草剤については削除または剤名のみ掲載とした。ただし、流通量が一定量以下であっても難防除雑草防除での使用が推奨される剤などは引き続き掲載した。

2 殺菌剤・殺虫剤に関する改正点

各品目の本文（防除方法が記載されている箇所）の改正点は以下のとおりである。なお、「防除時期」とは防除適期に関する記載であり、適用の「使用時期」の範囲内ではあるものの、記載が異なる場合があることに留意する。

ながの植物防疫

作物名	対象病害虫など	改正	内 容	理由
水稲	稲こうじ病	追加	【穂ばらみ期】 ドイツボルドー A (2,000倍)	R 5 農薬情報
	ヒメトビウンカ、 イネ縞葉枯病	追加	【総括注意】ヒメトビウンカが媒介するイネ縞葉枯病の防除には、オキサゾスルフィル、トリフルメゾピリム、ピメトロジン、フルピリミンのいずれかを含有する苗箱施薬剤を使用する。	
		追加	イネ縞葉枯病の防除要否判定は、前年の水稲登熟中期頃（8月下旬頃）のイネ縞葉枯病発病株率30%またはヒメトビウンカのイネ縞葉枯病ウイルス保毒率10%を目安とする。	
水稲	飼料用イネ	追加	C s. オリゼパディート箱粒剤	
麦類	赤かび病	追加	「県内で作付けされている全ての品種は本病に感染しやすいため、薬剤散布による防除を徹底する。」など	R 5 技術情報
スイートコーン (未成熟とうもろこし)	すす紋病	追加	チルト乳剤 25 (1,000倍)、シグナムWDG (2,000倍)、トリフミン水和剤 (2,000倍)	R 5 農薬情報
	アワノメイガ	追加	アクセルフロアブル (1,000~2,000倍)	R 6 農薬情報
りんご	展葉期	追加	ベルコート水和剤 (1,000倍)	R 6 農薬情報
	8月上・中旬	変更	スモモヒメシクイは8月上旬~9月中旬が重要防除時期である。	
		追加	ハダニ類の発生が多い場合は、殺ダニ剤を散布する（別表-3参照）。	
別表-2 キンモンホソガ	追加	キラップフロアブル (1,000倍)	R 6 農薬情報	
なし (1)「二十世紀」・ 「南水」	落花直後	追加	ベランティーフロアブル (8,000倍)	R 6 農薬情報
	5月(前回より7日後)	追加	スコア顆粒水和剤 (2,000倍)、ベランティーフロアブル (8,000倍)	販売終了に伴う代替
	6月(上旬~中旬)	追加	モスピラン顆粒水溶剤 (2,000倍)	失効に伴う代替
	8月(中旬~下旬)	追加	ベルコート水和剤 (1,000倍)、ベルコートフロアブル (1,500倍)	販売終了に伴う代替
(2)「幸水」・「豊水」	5月(落花直後)	追加	【別表-1】ベランティーフロアブル (8,000倍)	R 6 農薬情報
	6月(上旬~中旬)	追加	モスピラン顆粒水溶剤 (2,000倍)	失効に伴う代替
ぶどう (1)「巨峰」、 (2)「シャインマスカット」	休眠期	追加	褐斑病：前年発生園では落葉を焼却するか土中に埋める。	
		追加	根頭がんしゅ病：わら巻による防寒を実施する(「巨峰」の総括注意2参照)。	
	開花直前	追加	【発生病害虫名】チャノキイロアザミウマ	
(3)「デラウェア」、 (4)加工用ぶどう	6月下旬~7月上旬	追加	ミネクトエクストラSC (10,000倍)	R 6 農薬情報
	休眠期	追加	褐斑病：前年発生園では落葉を焼却するか土中に埋める。	
かき	6月上旬	追加	モベントフロアブル (2,000倍)	R 5 農薬情報
	6月下旬	削除		
くり	モモノゴマダラノメイガ	追加	モスピラン顆粒水溶剤 (2,000倍)	R 6 農薬情報
くるみ	褐斑病	追加	ICボルドー66D (50倍)、オーソサイド水和剤80 (800倍)	R 6 農薬情報
ブルーベリー	ミズキカタカイガラムシ	追加	越冬幼虫を除去する。	
トマト ミニトマト	かいよう病	追加	クプロシールド (1,000倍)	R 6 農薬情報
きゅうり	炭疽病	追加	ベルコートフロアブル (2,000倍)	R 5 農薬情報
	ハダニ類	追加	フーモン (1,000倍)	R 5 農薬情報
いちご	うどんこ病(育苗期)	新設	・無病苗を用いる。 ・[参考農薬] ベルクート水和剤 (1,000倍)	
きゃべつ	黒斑病	新設	アミスター20フロアブル (2,000倍)	R 5 農薬情報
	べと病	追加	レーバフロアブル (2,000倍)	R 5 農薬情報
	株腐病	追加	ファンタジスタ顆粒水和剤 (3,000倍)	R 6 農薬情報
	コナガ	追加	【別表】ファインセーブフロアブル (1,000倍)	R 5 農薬情報
	アザミウマ類	追加	ファインセーブフロアブル (2,000倍)	R 5 農薬情報
カリフラワー	黒すす病	新設	シグナムWDG (1,500倍)、アフエットフロアブル (2,000倍)、ファンタジスタ顆粒水和剤 (3,000倍)	R 5 農薬情報
ブロッコリー	アザミウマ類	新設	ファインセーブフロアブル (1,000倍)、ベネビアOD (2,000倍)	R 5 農薬情報
はくさい	黒斑病	変更	【防除時期】生育期間	
		追加	ケンジャフロアブル (1,500倍)	R 6 農薬情報
レタス、 非結球レタス	黒腐病	変更	Zボルドー500倍を定植後から予防散布する。	
	コルキールート病	新設	・「育苗は無病培土を用いる。」など耕種的防除法の記載 ・ダゾメット剤(ガスタード微粒剤、バスマイド微粒剤) (10a当り30kg)	R 5 農薬情報
非結球レタス	べと病	追加	ザンプロDMフロアブル (1,500倍)	登録拡大
	軟腐病	追加	スターナ水和剤 (2,000倍)	登録拡大
	腐敗病	追加	スターナ水和剤 (2,000倍)、マスタピース水和剤 (1,000倍)	登録拡大
セルリー	疫病	新設	・「ほ場の排水対策を行う。」など耕種的防除法の記載 ・ユニフォーム粒剤(株あたり2g)	R 6 農薬情報
パセリ	疫病	追加	ほ場の排水を図る。	R 6 農薬情報
		変更	ユニフォーム粒剤を推奨農薬に	
	うどんこ病	追加	シウチノスケフロアブル (2,000倍)	R 6 農薬情報

作物名	対象病害虫など	改正	内 容	理由
たまねぎ	黒腐菌核病	新設	【定植直前】〔参考農薬〕セイビアーフロアブル20 (500倍) 【生育期間】〔参考農薬〕パレード20フロアブル (2,000倍)	
ねぎ	黒腐菌核病	新設	【育苗期後半～定植当日】〔参考農薬〕パレード20フロアブル (100倍) 【生育期間】〔参考農薬〕セイビアーフロアブル20 (1,000倍)、パレード20フロアブル (2,000倍)	
チューリップ	ネダニ	削除		
無人航空機 麦	赤かび病	追加	ミラビスフロアブル (8～16倍)、ワークアップフロアブル (16倍)	R 6 技術情報

3 除草剤に関する改正点

作物名	対象雑草	防除時期	改正	改正内容	改正理由
水稻	一年生雑草および ホタルイ	移植直後～ノビエ2.5葉期 (但し、移植後30日まで)	追加	サラブレッドGO400FG、ラオウジャンボ	R 6 農薬情報
		移植後3日～ノビエ3葉期 (但し、移植後30日まで)	追加	カイリキZフロアブル	R 6 農薬情報
麦類	一年生及び多年生 広葉雑草	小麦幼穂形成期雑草茎葉 散布又は全面散布	追加	MCPソーダ塩	R 6 普及技術

特集 カメムシ
◆普通作物 農業試験場 阿曾和基

(1)水稻の斑点米カメムシ類

本県的水稻栽培は、全国的にもトップクラスの一
等米比率を誇っているが、本年はカメムシ類による
斑点米被害（着色粒）が一等米比率の主な低下要因
となっており、斑点米対策は栽培上の重要事項とな
っている。

「斑点米カメムシ類」は、イネが出穂すると穂か
ら吸汁し、玄米の一部が褐変あるいは黒変した斑点
米を生じさせるカメムシの総称である。カメムシ種
は地域によって異なるが、その発生様相は温暖化等
の気象の影響、雑草地の増加や水稻品種の変遷等
の水田利用状況及び栽培環境の変化等により変化する。

本県における斑点米カメムシ類の発生状況を、病
害虫防除所が実施する発生予察調査（本田内すくい
取り調査、8月下旬）の結果からまとめた（図1）
ところ、斑点米カメムシ類全体の捕獲地点率は過去
から増加しており、年次によって増減はあるが、
2010年代後半から捕獲地点率が高い状況が続いて
いる。また、発生カメムシ種をみると、アカスジカス

ミカメの発生地域の拡大及び発生量の増加が目立
ち、地域によっては主要種となっている状況である。
さらに、地域別にみると、上伊那地域ではホソハリ
カメムシ、木曽地域ではアカヒメヘリカメムシ、南
信州地域ではクモヘリカメムシの発生が特異的に多
く、地域によっても発生種・優占種に違いが認めら
れている。なお、県内の主要な斑点米カメムシ類の
外観・体長を図2に示す。



図2 長野県の主要な斑点米カメムシ類

左からアカスジカスミカメ、アカヒゲホソミドリカスミカメ、
トゲシラホシカメムシ類、アカヒメヘリカメムシ、ホソハリカ
メムシ、クモヘリカメムシ

また、近年、関東以西ではイネカメムシの被害が
問題となっている（図3、体長12～13mm）。これま
でのところ長野県での発生予察調査等で本種は確認
されていないが、2024年にも近隣の岐阜県、愛知県
から発生予察注意報が発出されており、今後の発生

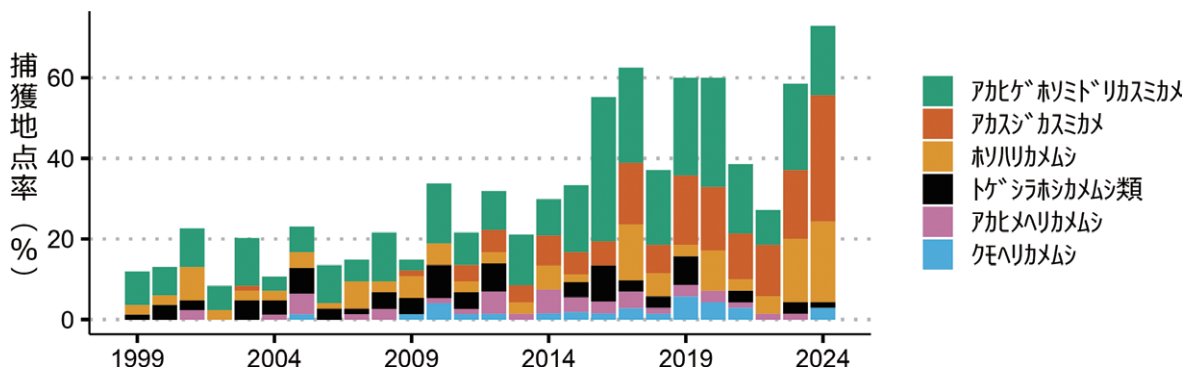


図1 発生予察調査による斑点米カメムシ類の捕獲地点率（1999年～2024年、病害虫防除所）



図3 イネカメムシ成虫
(茨城県農業総合研究センター農業研究所提供)

動向に注意が必要である。

【防除】

ア 雑草管理

斑点米カメムシ類は、水田侵入前には雑草が繁茂する畦畔等に分布し、特にイネ科雑草の出穂割合が増加すると発生密度が増加するため、畦畔管理をこまめに実施し、発生源となるイネ科雑草を繁茂させないようにする。ただし、出穂期近くの草刈りはカメムシを水田へ追い込むおそれがあるため、出穂2週間前までに実施する。

また、水田内雑草のホタルイ類やヒエ類が多発した水田では、カメムシの発生密度が高まり、斑点米被害が増加する場合があるため、水田内の雑草対策を適切に実施する。

イ 薬剤防除

出穂10日後頃に茎葉散布剤を散布する。散布が適期より早い場合は、残効が低下する登熟期後半の被害が抑制できないおそれがあるため、散布時期に注意する。

なお、クモヘリカメムシ発生地域では、1回防除では斑点米被害を抑制できない場合もあるため、発生が多い場合や例年発生が多い地域では2回防除を実施する。また、水面施用剤(粒剤等)は茎葉散布剤と比較して防除効果が低い事例も認められているため、特にクモヘリカメムシの発生が多い地域では茎葉散布剤を使用する。

ウ その他

水稻品種によってカスミカメ類による斑点米発生リスクが高い品種があり、県内の主要品種では「あきたこまち」を「高い」、「風さやか」を「やや高い」、「コシヒカリ」を「中」と評価している(令和2年度第2回技術情報及び令和5年度第2回技術情報)。ただし、斑点米発生リスクが比較的低い品種であっても、無防除の場合には被害を受ける場合もあるため、特に斑点米被害の常発地では、品種によらず水田内及び畦畔の雑草管理や薬剤による適切な防除を実施する。また、ホソハリカメムシ等の大型カメムシ類では、割れ初めの発生程度にかかわらず斑点米被害が発生することに留意する。

(2)大豆の吸実性カメムシ類

大豆の子実を吸汁加害するカメムシ類を「吸実性カメムシ類」と総称する。本県での主要種はホソハリカメムシ(図4)で、その他に、イチモンジカメ

ムシ、アオクサカメムシ、ブチヒゲカメムシ等が発生する。



図4 ホソハリカメムシ、イチモンジカメムシ成虫

ダイズほ場には、若莢が付き始める時期から成虫が飛来し、吸汁しながら産卵も行。吸汁により、子実の品質低下及び減収を引き起こすが、被害程度は大豆の生育ステージによって異なる。莢伸長期前までに加害された場合は莢が黄変して落下する。また、子実肥大期に加害された子実の多くは登熟するものの奇形や変色粒となる。このため、収量面からは莢伸長期の加害による影響が大きく、品質面からは子実肥大期の加害による影響が大きい。

防除対策としては、幼莢期～子実肥大中期の薬剤散布が効果的で、発生が多い場合や例年発生が多い地域では10日間隔で2～3回防除を実施する。ただし、近年、現地圃場にて、カメムシ類による著しい吸汁加害により登熟期になっても落葉せず茎葉が緑色を保つ「青立ち症状」がみられるとの情報が寄せられている。このため、2025年度以降、カメムシ類の発生調査や防除試験に取り組み、長野県における大豆の吸実性カメムシ類の発生生態の解明と、より効果的・効率的な防除対策の確立に取り組む予定としている。

特集 カメムシ

◆果樹

南信農業試験場 主任研究員 福田 勉
果樹試験場環境部 研究員 石井伸洋

【カメムシ類の被害】

令和6年は過去に例を見ないほど、果樹園でのカメムシ類の発生が多い年となった。カメムシ類による果樹の被害は、カメムシが口針を果実に挿し込み吸汁することで生じ、吸汁された果実の内部はスポンジ状になる。吸汁された組織の肥大は停止するため、幼果期に加害された場合は果実に大きな窪みを生じるが、果実が十分に肥大した後に吸汁された場合は小さな窪みができる。昨年、果樹試験場が成熟期のりんごで確認した調査では、果皮表面の加害部はわずかに窪み、加害された部分の断面を見ると、カメムシは口針の先端から吸汁するため、スポンジ

状になった部分は果皮から少し内部へ離れていることが多い。

昨年、りんごで多く見られた果皮の窪みは、必ずしもカメムシによる被害ばかりではなかったと考えられる。果実表面に明瞭な孔が見えるものや、スポンジ状の部分が果皮から内部へ半円形に広がるものがあり、カメムシ以外の虫による被害や生理障害と考えられる症状もあった。なお、モモシクイガが食入した痕は果汁がにじんで白いカスが残ることがあり、窪みはカメムシのものよりも大きい。また、食入孔が果汁液で塞がっていることもあり、果実を割ってみると、食入孔から芯へ向かって食い進むこと、幼虫は主に果芯部を食害すること、老熟幼虫はトンネル状の脱出孔を開けることから判別できる。

長野県で果樹を加害する主なカメムシはチャバネアオカメムシとクサギカメムシである。

【チャバネアオカメムシ】

体長は10～12mmで、前年に発生した成虫が主に雑木林の落葉下で越冬する。春、気温が上昇するとマツ・イチイ・スギ・サクラ・ケヤキ等に移動し、7月頃からスギやヒノキへ移動し増殖。そして秋には再び雑木林の落葉下へ移動する。この移動の途中に果樹園があると吸汁被害が生じるが、りんごやなしの果実では増殖できないとされ、チャバネアオカメムシにとって好適な餌ではないと考えられている。南信農業試験場内における2024年のフェロモントラップ調査によると、越冬世代の誘殺は5月中旬頃から始まり、多い時には半旬当たり20頭が誘殺された(図1)。7月に入ると誘殺される個体の数が増加し、当年世代(新成虫)が誘殺されたと考えられる。

卵及び幼虫の発育零点と有効積算温度から日別平均気温(長野地方気象台の平年値)を基に産卵時期別の羽化日を算出すると、例えば、5月20日に産下された個体は7月20日ごろに羽化し、8月20日ごろまでに産下された卵は羽化まで達することが可能である。7月20日に羽化した個体は7月末から産卵を



写真1 日本なし「あきづき」の果実を吸汁するチャバネアオカメムシ(金子原図)

始め、この世代の羽化は9月ごく初めになることから短日の影響を受けて休眠し、越冬成虫となる(1980、柳ら)。

【クサギカメムシ】

本県では年1回の発生がほとんどである。越冬は、成虫が山間地帯の家屋内や屋根裏、瓦の下等の隙間で行う。この他、木材等が積んである隙間や樹皮の間等でもみられるが、量的には少ない。

越冬成虫は、4月上旬頃から越冬場所である家屋等の表面に現れ、5月上旬頃をピークに越冬場所から離脱する。離脱後の個体の多くは、越冬場所付近のマツ・イチイ・スギ・サクラ・ケヤキ等の樹木に5月末頃まで飛来する。越冬成虫の果樹園への飛来は、越冬場所付近の樹木への寄生が少なくなる5月下旬頃から始まり、6月末頃まで続く(写真2)。産卵は5月下旬頃から始まり、主に寄生植物の葉裏に28卵程度まとめて産み付ける。越冬成虫の多くは7月頃までに死亡する。果樹園への飛来は、越冬成虫が産卵・繁殖植物を求めて分散する過程でみられるもので、果樹葉上での産卵は少ない。多くは雑木林内の樹木で産卵すると考えられている。

主な寄生植物は、クサギ・クワ・キリ・ノブド

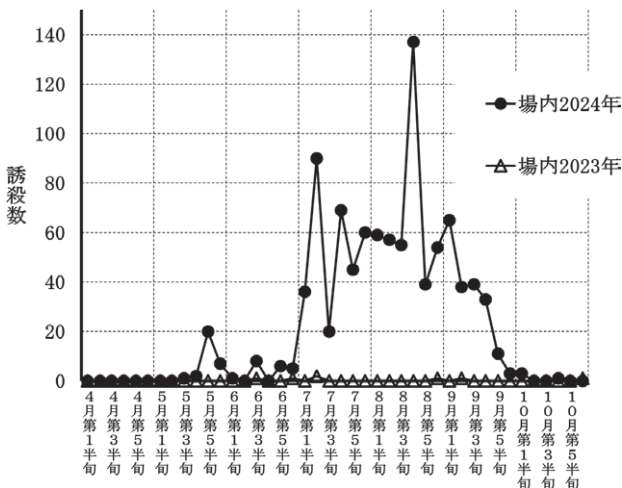


図1 場内におけるチャバネアオカメムシ誘殺数 (南信農業試験場)



写真2 クサギカメムシ成虫(2024年)

ウ・ダイズ・キササゲ等で、中でもキリは好適な寄主である。これらの樹上において、新成虫（第1世代成虫）は8月頃から認められる。

新成虫の越冬場所への移動は9月下旬頃から始まるが、この直前に越冬場所付近の樹木への飛来がみられる。飛来は9月末～10月上旬に急増する。

【カメムシ類の防除】

果樹を加害するカメムシ類は、果樹園以外の雑木林等での生活が主体で、被害のほとんどが園外からの飛来によって生じるため、防除は非常に困難である。このため、殺虫剤散布を行う場合は園内をよく観察し、成虫の発生状況を確認することが重要であ

る。成虫は果実や葉の隙間に潜り込み見えにくいいため、枝をゆする等してよく観察する。なお、県防除基準で定める各品目での発生時期は次の通りである。りんごは落花10～14日後と8月上旬～9月上旬、なしは5月～9月、ももは落花10日後～6月下旬と8月中旬であるため参考とする。薬剤はりんご、なし、もものカメムシ類に対して、スミチオン水和剤が有効である。また、一部の合成ピレスロイド剤やネオニコチノイド剤も効果があるため、品目毎に使用回数や収穫前日数を確認し散布する。なお、多発時は防除間隔を空け過ぎないように注意する。

小麦ほ場の強害雑草 オオブタクサの 生育特性と防除技術

長野県農業試験場 主任研究員 宮原 薫

本誌2024年7月号において、小麦ほ場の強害雑草であるオオブタクサ (*Ambrosia trifida* L.) の形態や特徴、本県の小麦ほ場における発生状況などについて紹介したが、農業者、地元JA、JA全農長野、農薬メーカー、農業農村支援センターの協力のもと、2023年から行った生育特性調査や除草剤試験から得られた結果を令和6年度（2024年度）長野県普及に移す農業技術として公表したので、本稿においてその概要を紹介する。

1 オオブタクサの生育特性

県北部の小麦ほ場では、オオブタクサは3月中旬に出芽し、深さ10cmからでも出芽する。4月上～下旬に出芽個体数は最大に達し、激発ほ場では680個体/㎡に達した。小麦の成熟期である6月中旬には、生育競合により100個体/㎡程度まで減少したが、ほとんどの個体が草丈100cm以上、最長205cmに達し、ジャングル状態となった（図1）。

オオブタクサが40個体/㎡以上になると、遮光による影響からか、その他の雑草種がほとんど発生しなかった。

2 小麦の減収被害

図1のように高密度にオオブタクサが発生した結果、小麦の減収率が6割以上となる場合もあった。

3 オオブタクサに対する防除技術

(1) 土壌処理型除草剤による防除効果

県内で普及している3種の土壌処理型除草剤（以下、土壌処理剤）を供試してその効果を評価したところ、オオブタクサの出芽がわずかに低減する傾向はみられたが、無処理区と明らかな差はなかった。



図1 オオブタクサに覆われた小麦ほ場
(2023年長野県北部)

これは、土壌処理剤は小麦播種後から出芽前までの時期（本試験では11月）に散布するが、オオブタクサの出芽まで4ヶ月ほど期間が空くため、十分な防除効果が得られないことによると推察された。

(2) 生育期茎葉処理型除草剤の処理適期及び防除効果

県内で普及している4種の生育期茎葉処理型除草剤（以下、茎葉処理剤）を供試して、ポット試験を行ったところ、オオブタクサの最大葉齢が3葉以上では防除効果が低く、本葉2葉期（4月上～中旬）（図2）までが処理適期であることがわかった。

イ 本葉2葉期処理による除草効果

2024年に場内及び現地ほ場において、最大葉齢が本葉2葉期に至ったタイミング（場内：4月12日、現地：4月5日）で、4種の茎葉処理剤を散布した。小麦の成熟期前（6月中旬）に残存したオオブタクサの乾物重は、どの土壌処理剤との体系処理を行った場合でも、MCPソーダ塩区が最少となった（図3、

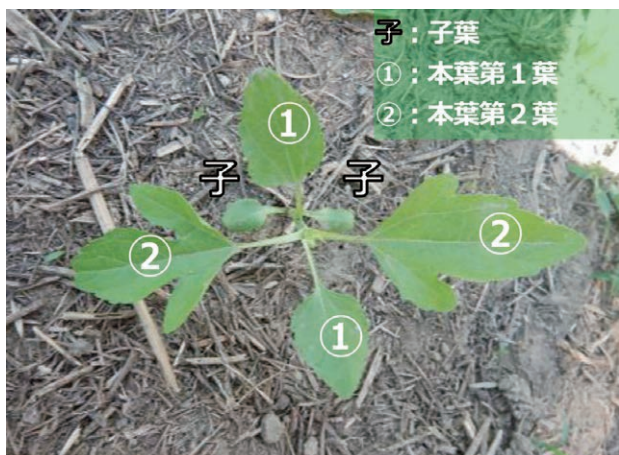


図2 オオブタクサの本葉2葉期の状況 (2024年農業試験場)

現地ほ場データは略。

以上のことから、オオブタクサに対して効果が高い防除方法は次のとおりである。

(播種後出芽前の土壌処理剤)
 →オオブタクサ本葉2葉期(4月上~中旬頃)までに、MCPソーダ塩300g/10a(希釈水量100L)を散布

この普及技術は、県北部の標高300m地帯の小麦晩播栽培におけるデータに基づくため、標準期の小麦播種の場合や高標高地では、オオブタクサの出芽時期などが異なる場合がある。詳細については、長野県農業関係試験場のホームページ<研究情報>研究成果検索により参照すること。

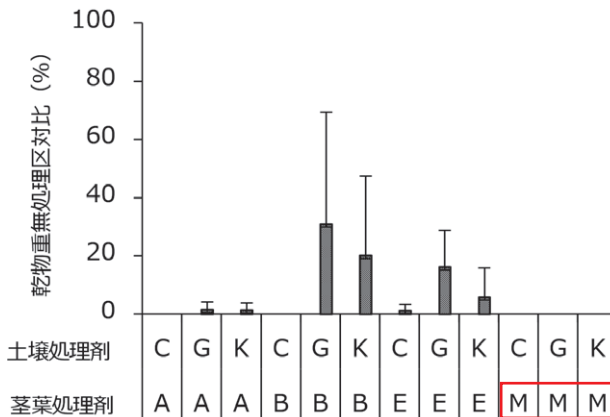


図3 オオブタクサに対する除草剤体系処理による防除効果 (場内ほ場) (2024年農業試験場)

【土壌処理剤】 C: クリアターン細粒剤 F: ガレースG
 K: キックボクサー細粒剤 F

【茎葉処理剤】 A: アクチノールB乳剤※ B: パサグラン液剤
 E: エコパートフロアブル M: MCPソーダ塩

※アクチノールB乳剤は、現在製造中止のため参考成績

植防短信

長野県農薬安全コンサルタント協会 総会開催される

(一社)日本植物防疫協会主催の研修を終了した者で組織する長野県農薬安全コンサルタント協会(会長 廣田圭亮: 会員数74名・長野県農薬卸商業協同組合の内部組織)の平成7年度(第46回)通常総会が1月23日に長野市で開催されました。

総会に先立ち、長野県農政部農業政策課の大池英樹企画幹兼企画係長による「第4期長野県食と農業農村振興計画について」をテーマとした研修が行われ、長野県を取り巻く状況と県づくりの方向性について解りやすく、興味深い説明がありました。

その後、指導農薬研修会では、新美達生クロルピクリン工業会事務局長による「クロルピクリン剤の安全使用について」と題して説明がありました。クロルピクリン剤使用時の周辺住民への配慮と被覆の重要性を再確認しました。

引き続き総会が開催され、令和6年度事業報告並びに決算、令和7年度事業計画並びに収支予算書等が承認されました。役員改選では、廣田圭亮会長が再任されました。(長野県農薬卸商業協同組合)

地域情報

南信州地域におけるネギ栽培の課題と対策について

1 はじめに

長野県南信州地域ではネギ栽培が盛んで、JAみなみ信州の出荷額でもきゅうりに次ぐ第2位の品目(R5実績)である。また、JA独自規格の「土付きねぎ」も特徴的である。

昨年は7月から9月中旬まで最高気温が連日30℃を超え(アメダス飯田)、また干ばつの影響もありネギの生育が停滞した。加えて、高温条件下で白絹病や軟腐病等が増加し、ネダニ類の被害も問題となった。

2 農薬等普及展示ほの設置

ネダニ類の対策として、飯田市山本のネギ栽培ほ場において、農薬等普及展示ほを設置し、グレーシア乳剤の効果確認試験を実施した。

3 ねぎ生産者への情報提供

2月3日にJAみなみ信州の野菜部会ねぎ専門部の生産販売反省会・研修会が開催され、その中で今年問題となった白絹病、軟腐病、ネダニ類の発生状況に関する情報共有や、対策について検討された。

また野菜花き試験場からは新たな作型の提案として早出し・越冬作型の試験報告があった。なお、越冬作型については現在、試験場の現地試験として飯田市において実証が行われている。

4 今後の課題

秋冬期が主な出荷となる当地域のネギ栽培においては、作柄が不安定となる高温や干ばつといった期間がさらに長くなることが予想される。

そこで効果的な薬剤の選定を進め、病害虫の発生を抑えるとともに、輪作や土づくり等耕種的な対策もあわせて実施し、生育の確保に取り組む。あわせて生産者や関係機関相互の情報共有を強化し、地域全体でのネギ栽培の安定を図っていく。

(南信州農業農村支援センター 片桐直樹)



JAみなみ信州野菜部会
ねぎ専門部の反省会の様子

空中防除と生産者自らの地上防除により概ねの水田で実施されていますが、地域によって1等米比率に大きな差が生じています。そこで昨年度、地域ごとの斑点米カメムシ類の防除回数と斑点米の発生率の関係を調査したところ、出穂後1回の防除より2回の方が、斑点米の発生率が低下する傾向が確認できました。そこで今年度は全農長野と連携して、ドローンによる斑点米カメムシ類の空中防除で、出穂後の1回防除と2回防除の効果を検証する現地試験を実施しました。

試験は管内の斑点米カメムシ類の多発地帯3地区で実施しました。その結果、いずれの地区でも1回の防除より2回防除した方が、斑点米カメムシ類の発生数が減少し斑点米発生率も低くなる傾向が確認できました。しかし同時に、水田内にノビエ等の雑草が多発している場合は、2回防除の効果が低下することも確認されました。

以上のことから、1等米比率向上のためには、斑点米カメムシ類の出穂後2回の防除と併せて、水田雑草の防除も極めて重要であることを再認識しました。

(木曾農業農村支援センター 平出有道)



全農長野のドローンで薬剤散布

斑点米カメムシ類の2回防除(ドローン利用)の
効果検証試験を実施しました

木曾管内の1等米比率は70%を下回り、県下最低の水準です。格付け低下の要因の殆どは斑点米カメムシ類による被害粒です。斑点米カメムシ類の防除実態は、病害虫防除組合に委託するドローンによる

協会だより

●令和7年版 「長野県農作物病害虫・雑草防除基準」販売中
【900円(消費税込み、送料別途)】

問い合わせ・ご注文先
(一社)長野県植物防疫協会 <https://nagano-ppa.jp/bojokijun.html>

【行事】

- 1月30、31日 試験研究推進会議病虫部会(長野市)
- 2月10日 令和7年度農薬等展示ほ設置打合せ会議(長野市)
- 2月18、26日 農薬管理指導士更新研修会(Web)
- 2月19日 第2回普及技術検討会(塩尻市)
- 2月20、21日 農薬指導管理士養成研修会及び認定試験(塩尻市、Web)
- 2月25日 病害虫防除研修会(塩尻市)

「ながの植物防疫」はホームページでもご覧になれます。
URL <https://www.nagano-ppa.jp/>